

ヨハネ8：12-59 イエスは世の光

8:12 イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」 8:13 そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。」 8:14 イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。 8:15 あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。 8:16 しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方がさばくのだからです。 8:17 あなたがたの律法にも、ふたりの証言は真実であると書かれています。 8:18 わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについてあかしされます。」 8:19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」 イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。」 8:20 イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。 8:21 イエスはまた彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」 8:22 そこで、ユダヤ人たちは言った。「あの人は『わたしが行く所に、あなたがたは来ることができない』と言うが、自殺するつもりなのか。」 8:23 それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。 8:24 それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」 8:25 そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれですか。」 イエスは言われた。「それは初めからわたしがあなたがたに話そうとしていることです。 8:26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であって、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです。」 8:27 彼らは、イエスが父のことを語っておられたことを悟らなかった。 8:28 イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。 8:29 わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行うからです。」 8:30 イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。 8:31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。 8:32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」 8:33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどうして、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」 8:34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。 8:35 奴隷はいつまでも家にいるではありません。しかし、息子はいつまでもいます。 8:36 ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。 8:37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。 8:38 わたしは父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行うのです。」 8:39 彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」 イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい。 8:40 ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。 8:41 あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っています。」 彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにひとり父、神があります。」 8:42 イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。」

8:43 あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。 8:44 あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。 8:45 しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。 8:46 あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。 8:47 神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」 8:48 ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか。」 8:49 イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかれてはいません。わたしは父を敬っています。しかしあなたがたは、わたしを卑しめています。 8:50 しかし、わたしはわたしの栄誉を求めません。それをお求めになり、さばきをなさる方がおられます。 8:51 まことに、まことに、あなたがたに告げます。だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません。」 8:52 ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今こそわかりました。アブラハムは死に、預言者たちも死にました。しかし、あなたは、『だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を味わうことがない』と言うのです。 8:53 あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか。そのアブラハムは死んだのです。預言者たちもまた死にました。あなたは、自分自身をだれだと言うのですか。」 8:54 イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光はむなしいものです。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方のことを、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。 8:55 けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています。 8:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思っ大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」 8:57 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのにアブラハムを見たのですか。」 8:58 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」 8:59 すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。

導入

ヨハネの福音書の学びを続けておられる方は、なぜ8：1-11を省いたのか不思議に思っておられるかもしれせん。

1. もともとの写本では、7章52節の直後に8章12節が登場します。

私たちに受け継がれているものは、昔のギリシャ語の写本です。例外もありますが、コプト教の福音書やラテン語の聖書には、この個所は含まれていません。
2. 初代教会の父祖たちは皆、この個所を省きます。
3. この話が実際に起こったことは否定しませんが、仮庵の祭りの話と前後関係が合わないからです。
4. この個所を含めた聖書学者も過去にはいましたが、聖書のあらゆる部分にこの話を挿入していることから、どこに入るべきかという点について聖霊の一致が見られません。

この出来事が実際に起こって記録されたことは明らかですが、ヨハネがもともと記したヨハネの福音書の一部ではないと考えられます。これは良い話ですし、実話ですが、この学びのシリーズでは取り上げないことにしました。

私がなぜこの個所をヨハネの福音書の学びに含めなかったのか、詳しい説明をご希望の方は、以下のサイトをご覧ください。（英語のみ）

ジョン・パイパー師がこれについて詳しく説明してくれます。

聖書全体が神の靈感によって書かれた書物であると私は信じています。この個所がヨハネの福音書の一部であるべきかどうかという問題は、神のみことばの信びよう性を揺るがすものではありません。

私はここで、神のみことばに疑問を呈しているのではなく、この件について私がこれまでに学んだことに忠実でありたいだけです。

ヨハネの福音書と新約聖書の学者で信頼のおける福音派の人物は、ドン・カーソン師です。彼は、この部分がもともとヨハネの福音書の一部ではなく、後に書き加えられたと考えます。

皆さんもぜひ、ジョン・パイパー師のサイトを開き、ご自身の結論を導き出してください。

私の役目は、この件に関して皆さんを説得することではありません。今朝私が選んだみことばを忠実に教えることです。今日の個所はヨハネ8：12-59です。

この個所で、イエスはまた「水」と「光」が二大テーマとなる「仮庵の祭り」におられます。先週、水のテーマについて学びましたが、今週は、光というテーマについて学びます。

旧約聖書では、「光」は多くのことを象徴します。

神の民がエジプトを脱出した出エジプト記では、神の光の柱が民を自由へと導きました。

エジプトの10の災いで、神は三日間エジプト全土を深い闇で覆われました（出エジプト10：21-29）。しかし、神の子であるイスラエルの民の住むところには光がありました。神がご自身の子には光を与え、エジプト人には闇をもたらされたのです。

イザヤ42：6-7

42:6 「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。 42:7 こうして、見えない目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。

神はこの個所で、異邦人にとっての光となるしもべを約束なさいました。このしもべは、盲目の人の目を開き、牢獄から囚人を連れ出し、暗闇にいる人を解放するといえます。

目に見える光がなければ、私たちは何も見ることはできません。同様に、霊的な光がなければ、人は霊的な暗闇の中にいます。

1. 世の光が語られる－v. 12-30.

12節には、「イエスはまた彼らに語って言われた。」とあります。このことから、これが7：45-52のできごとに対する答えであることがわかります。イエスは、群衆に向かって、ご自身が世の光であると宣言されました。それは祭りの最終日のことでした。

祭りの期間中、神殿はどこも光で照らされていました。神殿を照らす金の燭台に加え、この期間専用のたいまつが灯されます。エルサレムは丘の上にあり、神殿の光が煌々と輝いていたので、周辺地域からも見えるほどでした。

光が消された後に、イエスは立ちあがっておっしゃいました。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

a) 13-20節で、イエスはご自身が人の姿をした神であるとあらためておっしゃいます。

14節で、イエスはご自身がどこから来て（天国）、どこに行くのか（天国に戻る）を知っているとおっしゃいました。

イエスは、100%神であると同時に100%人間でしたが、霊的な事柄に関して確信をお持ちでした。私たちもイエスを救い主として知り、愛しているなら、霊のいのちについて確信が持てます。また死後の行き先についても確信が持てます。これはとても大切なことです。と言うのも、人は誰もがいつかは死ぬからです。ですから、死後の行き先についての確信が必要です。

どこから来たのかを認めるのは容易ではありません。私たちはアダムとエバの子孫です。それが私たちの出元です。つまり、生まれながらに罪の性質を持ち、罪の赦しを必要とする存在です。

現代人にはこれが非常に難しいことです。プライドや自己中心な考え方に邪魔されて、自分の本性を認められずにいます。

ローマ5：12は、はっきりと語ります。

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。

15-18節で、イエスはご自身の裁きを弁護なさいます。ユダヤの律法で、ふたりの証言は真実であるとされます。イエスは、ご自身が神の子であることを自分が証言し、天の神がそのとおりでであると証言されるとおっしゃいます。

マルコ1:11 そして天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

19節で、イエスはユダヤ教指導者たちを非難されます。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。」とおっしゃいます。ここでイエスは、ご自身が父と同じだと言っておられます。つまり、神であると宣言されたわけです。

ユダヤ人は、目の前に立っているイエスが神であることを受け入れられませんでした。私たちも、イエスが人の姿をした神であることを受け入れるまでは、罪から救われることはありません。

私たちの罪の代価を支払えるほど善い人はいませんでした。唯一イエスだけがそうおできになります。それはイエスが100%聖なる神であられるからです。

神から見て、私たちの罪は深く、完全な人によって完全とされる必要がありました。

b) 21-30節で、イエスは神からの使命と運命を改めて宣言されます。

24節でイエスは辛らつな発言をなさいます。人の姿で天から来られた神であるイエスをユダヤ人が信じないなら罪の中で死ぬ、とイエスはおっしゃいました。そして、イエスが上げられてから、イエスが神であったことを彼らが知るともおっしゃいました。

ヨハネの福音書の残りの部分や他の福音書から、私たちはイエスの使命を知っています。それは、この世の罪を背負って死ぬためにこの地上に来ることでした。神は人類を救う唯一の方法としてイエスを遣わされました。これ以外に人類に与えられた救いの計画はありません。イエスこそ、救いのご計画そのものです。

イエスが十字架上で死なれたとき、イエスが神である十分な証拠がユダヤ人には与えられました。日中に三時間も真っ暗闇になったことや、厚さ1.2cmもある神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けたことです。その幕の長さは、この建物の高さほどもありました。

神殿の幕が真っ二つに裂けたことも非常に重要です。

この幕は、聖所と至聖所を隔てるものでした。神のご臨在は至聖所にありました。至聖所には、大祭司が年に一度だけ、民の贖いのために入る事が許されました。

この幕がふたつに裂けたことで、私たちは神とともに聖所に入り、神のご臨在の中にある事が可能になりました。これは、イエスの十字架の死によるものです。私たちの代わりに祭司に祈ってもらう必要はもうありません。イエスを信じて、直接神に話ることができるのです。

十字架のもとにいた百人隊長は、イエスが神であると信じました（ルカ23：47）。

私たちが罪の中で死にたくなければ、イエスを信じなければなりません。イエスが神であり、私たちの過去、現在、未来の罪を背負って死ぬために来てくださったことを信じる必要があります。

ユダヤ人は、この教えにひどく腹を立てました。イエスを信じるまでは私たちがこの教えに不快感を示します。私たちにはプライドがあり、イエスを必要としていることを認めたくないからです。自分の思ったとおりに人生を生きたいと思うのです。

そうすることもできますが、本当の意味で心が満たされて幸せになることはありません。

イエスの差し出される永遠のいのちを受け取らなければ、後の日に死んでよみがえったときに、永遠の罰と向き合うことになります。

今、イエスを信じる一歩を踏み出しませんか。

30節は、このとき多くの人々がイエスを信じたと言います。

あなたも今日、そのひとりになれます。

2. 世の光が、ユダヤの民の持つ信仰の誤りをあらわにする。(31-59節)

イエスはまず、イエスを信じるユダヤ人に語られます（31-32節）。

イエスは、信じるという人を誰でも受け入れるわけではありません。主は信仰を試されません。あなたの信仰は本物か、とお尋ねになります。

イエスは、本物の信仰かどうかをいくつかの条件で試されます。

a) もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。

これはどういう意味でしょう。

ここでの出来事から、いくつかの可能性が考えられます。

まず、弟子であることは、信じることから始まります。—イエスのご自身についておっしゃることばを信じなければなりません。

次に、イエスのことばに常にとどまることを意味しますが、そこには4つの側面があります。

1. イエスのことばを聞く。 弟子は、イエスの御声を聞こうと耳を澄ませます。御声だとわかるまで、勝手な行動は起こしません。どんな状況でもイエスの御声を待ち望むというのは簡単ではありません。
2. イエスから学ぶ。 弟子と訳されたギリシャ語の単語は学ぶ者という意味です。弟子は生涯、イエスのことを学び続けます。
3. イエスのことばに思いを巡らす。 イエスのことばにとどまるとは、イエスがおっしゃったことを常に学ぶことです。イエスのことばは洞察に満ちています。ですから、主のおっしゃることをしっかり理解する必要があります。

4. イエスのことばに従う。聖書は学を積んで知性を高めて満足するための書物ではありません。神が私たちに望んでおられることを知るために、聖書を学びます。弟子は、そうするために学ぶ人です。イエスは、私たちがイエスから得た知識をもとに行動することを要求されます。

イエスは32節で、イエスのみことばにとどまり、弟子になれば表れるべき成果について語られます。

イエスは、弟子になれば自由になるとおっしゃいます。何から自由になるのでしょうか。

恐れから解放される。—イエスとともに歩めば、恐れる必要はありません。イエスは、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」と約束してくださいます。(ヘブル13：5、申命記31：6)

自分自身から解放される。—弟子になるとは、自分を捨ててイエスに従うことです。マタイ16：24-26にはこう記されています。

マタイ16：24-26

16:24 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。16:25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。16:26 人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。

人から解放される。 私たちの生き方が、人の評判に左右されることがあります。作家 H.G. ウェルズは、神の御声よりも近所の人の声のほうが耳に届きやすいと言いました。

本物の弟子は、周りの人たちにどう思われるか何と言われるかということに気を取られなくなります。みことばで神が何とおっしゃるかに集中します。残念ながら、クリスチャンは他人に対して批判的になりがちです。神は、私たちが人を喜ばそうとするあまり、神への姿勢がおろそかになるのを喜ばれません。

最後に、本物の弟子は罪から解放される。 罪の罰から自由になるだけでなく、聖霊によって罪からきよめていただくことができます。

パウロはコリント第二7：1で次のように言いました。

愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

パウロにきよめられる必要があるなら、私たちはなおさら、イエスの血潮によってきよめられる必要があります。

使徒2章で、弟子たちは聖霊に満たされました(使徒2：4)。後に使徒4：8で、ペテロは再び満たされました。なぜペテロは改めて満たされる必要があったのでしょうか。ペテロも私たちも、満たされても漏れていくからです。人は日々、罪深い肉によって好き勝手な歩みをするよう誘惑されます。ですから、毎日神の聖霊に自らを明け渡さなければなりません。

エペソ5：18で、パウロは、酒に酔わずに聖霊に満たされなさいと言いました。パウロは酒に酔うという比喻を用いて、聖霊に満たされるとは制御の問題であると説明しました。

私は昔警察官だったので、酒に酔った人を何人も保護したことがあります。泥酔した人はアルコールにコントロールされています。おかしい行動を取る人や、怒って暴力的になる人もいます。彼らの行動はアルコール任せです。私たちが聖霊に満たされていると、聖霊任せな行動を取るようになります。

私たちは罪のない状態にはなりませんが、罪を犯すのを減らすことはできます。聖霊に人生をお任せすることによって、罪深い生き方を変えることができます。具体的にどうすればよいのでしょうか。

まず、イエスに人生すべてを明け渡し、毎日聖霊にある生き方ができるよう助けを求めましょう。明け渡すのは一度きりですが、神の聖霊との歩みは毎日続きます。これは、イエスの兵士になることと言えるでしょう。訓練された人生です。過酷で従順の要求される人生です。しかし、イエスが監督してくださり、聖霊が助けてくださる、祝福の人生でもあります。

それが、イエスの弟子の人生です。

次に、33-47節はユダヤ人の父が誰かについてです。

ユダヤ人指導者たちは、自分たちの立場や行いに対する弁明ばかり考えていました。彼らは33節で、自分たちはアブラハムの子孫であり、奴隷になったことはないと言います。

しかし、これは正しくありません。実際、ユダヤ人はエジプトで400年間エジプト人の奴隷でした。ユダヤ人というアイデンティティーを守ったことは良いのですが、神に選ばれた民という立場以上に、イエスは罪の性質を重く見ておられました。

イエスは、人が罪を犯すなら、罪の奴隷だとおっしゃいました。私たちにはどうすることもできないのです。罪に縛られているのです。

ユダヤ民族は、自分たちがイエスを必要としていることを理解できませんでした。神に選ばれた民という立場で十分だと考えていたからです。

イエスは44節で、ユダヤ人を痛烈に批判されます。彼らの父は神ではなく、悪魔だとおっしゃいました。イエスは、彼らの父は人殺しであり、うそつきだとおっしゃいます。

47節では、本当に神が父なら、イエスの言うことを聞いただろうとおっしゃいました。彼らは、イエスのことばを心から聞こうとしません。心が悪いからです。

ノンクリスチャンには、これが一番納得できないことでしょう。

ここにいる私たちは納得できたことを願います。

最後に、48-59節です。イエスの父とは誰でしょう。

ユダヤ人指導者たちが次にしたのは、イエスを信用ならない者と判断することです。彼らはイエスのおっしゃることが気に入らなかったのも、イエスを言葉で攻撃し始めます。

カウンセリングではこれを「置き換え」と呼びます。ボートをこぎ出すと、水が両脇に押しやられます。人は誰かに傷つけられると、他の誰かを傷つける傾向があります。その対象は、自分を傷つけた本人とは限りません。私たちの罪の性質がそうさせるのです。罪の性質にある自己防衛本能が働くからです。これはよくありませんが、誰でもそうしてしまうことがあります。

ユダヤ人は、お門違いな怒りをイエスに向けました。彼らはイエスが悪霊に取りつかれたサマリヤ人だと言いました。これは両方ともひどい侮辱です。

イエスは、ご自身の父が誰かを説明し始め、父についてこうおっしゃいました。

- a) イエスは父を敬っていて、自身の栄誉は求めていない。
- b) 父なる神はイエスの栄誉を求めてくださる。
- c) イエスは父なる神を知っており、父のことばを守られる。
- d) アブラハムは、イエスが地上に来て父のみこころを行っておられることを喜んだ。
- e) イエスは、アブラハムが生まれる前から自分はいたとおっしゃった。神を指すヘブル語の名は「わたしはある」です（出エジプト3：14）。

イエスはご自身を神だと宣言されました。その後、そこにいたユダヤ人たちは怒ってイエスに石を投げようとしたのですが、イエスは群衆の中に消えていきました。

当時の人々と OIC の私たちにとっての適用

当時の人々にとって、自分たちの信じていることに異議を唱えられるのは面倒なことでした。人々は神を礼拝し、すべての祭礼を何千年も守ってきました。神に選ばれた民という背景もあります。自分たちは特別な人間だという意識がありました。

しかし、彼らは己の心にある罪の性質を受け入れることができませんでした。また、彼らを罪から救うためにイエスが来てくださったことも納得しませんでした。プライドや慢心がイエスを受け入れない最大の原因でした。

日本にいる OIC の私たちにとっても、同じことです。もし私たちがクリスチャンでないなら、自分には罪の性質があつて、イエスに救っていただく必要があることを認めなければなりません。罪の性質から私たちを救う神のご計画は他にありません。

クリスチャンにも、同じ福音が必要です。生き方や考え方を改めて作り変えていただくためです。私たちは誰でも、罪の性質との葛藤があるはずで、怒りをお門違いなところに向けると、自分の過ちを認めず、神や人に謝罪しようとしません。罪の性質の奴隷にされてはいけません。イエスによって自由にしていただきましょう。罪を犯さないで、イエスに従えるよう助けてくださるのは、聖霊の働きです。

自分に正直になり、イエスと聖霊の御前にも正直になりましょう。そうすれば、クリスチャン人生で前進することができます。